

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	マリヴォー『いさかい』における視覚の役割について
Author(s)	中山, 智子
Citation	フランス文学, 22 : 29 - 37
Issue Date	1999-06-21
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041028
Right	
Relation	



マリヴォー『いさかい』における視覚の役割について

中山 智子

マリヴォーの作品の中の視覚にまつわるテーマ、観る／観られる関係や、頻繁に登場する鏡、仮面、仮装と、それらが作品に及ぼす影響などはこれまでも指摘されている。マリヴォーの晩年の一幕劇『いさかい』*La Dispute* (1744) についての研究でも、小川の水面のように姿を映し出す物理的鏡と、他者の眼という心理的鏡が、作品においてナルシズムなどのさまざまな恋愛感情を生む原動力となっていると指摘したラコーや、¹⁾人物関係が鏡像関係をなすと指摘した井村氏のように、²⁾主として鏡のテーマを扱った研究が多く見られる。

しかし本論では、『いさかい』がマリヴォーの劇作品の中でも最も素朴なレベルで、まず見る行為そのものが際立っている作品であることに注目したい。マリヴォーの他の作品には頻繁に登場する変装や身分の交換という視覚的要素は登場しない『いさかい』において、視覚はどのように扱われ、どのような役割を果たしているのだろうか。本論では登場人物の持つ外見への関心と物語に占める視覚の重要性を指摘しつつ、他の感覚との比較も行なうことで視覚の役割について考察していきたい。

『いさかい』は、王子とその恋人エルミアヌが男女のどちらが不実であるかについて討論し、それを確かめるために、森に行き、世話係（カリーズとメスルー）以外の人間を知らずに森の中の屋敷で育った、男女2人ずつの4人の若者たち（エグレ、アゾール、アディーヌ、メスラン）を引き合わせ、彼らがどのような行動を取るかを観察するという劇である。

初めて屋敷の外から出た若者たちは、小川や鏡、肖像画といった自分や相手の姿を映すものに非常な関心を示す。異性と初めて出会った男女は〈一目で〉恋に落ちる (Sc. IV, p.549 参照)。³⁾

視覚への関心はなによりも外見への関心に顕著に現われる。自分の姿を初めて見たエグレは、その「美しさ」とらわれる (Sc. III, p.548 参照)。そしてアゾールもまたエグレの美しさに夢中になる (Sc. IV, p.54 参照)。彼らにとって、「美しい」と「愛する」ことはほぼ同義語である (Sc. VI, p.552 参照)。相手の美しさから一目で恋に落ちる典型的な例としては、『恋に磨かれたアルルカン』*Arlequin poli par l'amour* (1720) が挙げられるだろう。妖精はおよそ才智に欠けてはいるが、このうえなく美しいアルルカンに夢中になる。

しかし、妖精はやはりアルルカンの才智のなさを嘆き、物語を通してアルルカンが恋によって才智を得ることがテーマとなるように、相手に対する評価は外見から内面へと移行しているのだ。しかし、『いさかい』では恋する相手への評価は外見に対してだけであり、内面が取り上げられることはない。

また、エグレと出会ったアディーヌは恋人メスランに、エグレの顔、肌の色、眼、口、身体つきを語り、容姿を詳細に描写してみせる。

ADINE : Oui, c'est une Églé : voici à présent comme elle est faite : c'est un visage fâché, renfrogné qui n'est pas noir comme celui de Carise, qui n'est pas blanc comme le mien non plus, c'est une couleur qu'on ne peut pas bien dire.

MESRIN : Et qui ne plaît pas.

ADINE : Oh, point du tout, couleur indifférente, elle a des yeux, comment vous dirais-je, des yeux qui ne font pas plaisir, qui regardent, voilà tout, une bouche ni grande ni petite, une bouche qui lui sert à parler, une figure toute droite, toute droite, et qui serait pourtant à peu près comme la nôtre, si elle était bien faite; qui a des mains qui vont et qui viennent, des doigts longs et maigres, je pense avec une voix rude et aigre, oh vous la reconnaîtrez bien. (Sc. III, p.560)

途中にメスランのあいづちが入るとはいえ、前後二つのアディーヌのセリフは一続きのものだと考えていいだろう。アディーヌにとってばかりでなく、若者たちにとってもこのセリフは劇中で一番長いものだ。それだけ、相手の外見への関心の度合いをうかがわせる。

外見のなかでも顔、とりわけ相手の眼差しに関する描写が多いのは、視線への敏感さを示しているといえよう。アゾールとの出会いの場面で、エグレの気を最初に引くのは彼の眼差しである (ÉGLÉ : [...] Attendez... Ses regards sont pourtant bien doux... (Sc. IV, p.549))。恋人たちは、お互いの眼を褒め合い (AZOR : [...] tout ce que je suis ne vaut pas vos yeux, ils sont si tendres. ÉGLÉ : Les vôtres si vifs.) (Sc. IV, p.550)), アゾールは、顔の中でもエグレの眼差しの美しさをまず褒めたたえる (AZOR : [...] comment est-il possible qu'on soit si belle, qu'on ait de si beaux regards. une si belle bouche, et tout si beau.) (Sc. VI, p.553))。

これらの見る行為及び外見への高い関心は、外の世界と世話人以外の他者に初めて接する若者たちにとって自然のものと見なされるかも知れない。彼らにとって、出会いの一つ一つ、発見の一つ一つが驚きなのである。しかしその出会いや発見はすべて視覚で認知さ

れる。以下はエグレが初めて屋敷の外に出た場面である。

CARISE : Venez Églé, suivez-moi; voici de nouvelles terres que vous n'avez jamais vues, et que vous pouvez parcourir en sûreté.

EGLE : Que vois-je, quelle quantité de nouveaux mondes.

CARISE : C'est toujours le même, mais vous n'en connaissez pas toute l'étendue.

ÉGLÉ : Que de pays, que d'habitations, il me semble que je ne suis plus rien dans un si grand espace, cela me fait plaisir et peur. (*Elle regarde et s'arrête à un ruisseau.*) Qu'est-ce que c'est que cette eau que je vois et qui roule à terre? Je n'ai rien vu de semblable à cela dans le monde d'où je sors.

(Sc. III, p.548)

初めて「新しい世界」に足を踏み入れ、エグレはその広大さに圧倒される。この「新しい世界」の発見が視覚からのみで行なわれるのに注目したい。これまで屋敷から一步も外に出ることなく育てられた彼女だが、屋内と外界との空気や温度の違い、顔にあたる風の感触や音、森の木々や土の匂い、聞こえてくるであろう小鳥のさえずりや羽音、初めて踏みしめる地面の感触といったものにはまったく注意が払われていない。そして次に目を留める小川も、彼女にとっては自らの姿を映し出す鏡でしかない。手を差し伸べて水の量感や冷たさを感じることは決してない。視覚以外の触覚や聴覚、嗅覚といった他の感覚は存在しないかのように全く言及されていないのだ。

エグレのみならず、エグレと同様に外界との接触を初めて経験したであろう他の3人の若者たちもまた、森の中での触覚や聴覚、嗅覚での体験には言及していない。小川についてもエグレと同様、鏡としてしか見なさず、誰一人手で触れもせず水の流れに足を入れようともしない。

そこまでのリアリティを要求しないのが芝居の約束事というのは容易だが、森の中というある種の異界を前提に持ち、これまで外界から隔離されて育った登場人物たちがその異界の中でどのような反応を見せるかは観客の関心を集めるところであろう。その異界との接触があまりにも視覚だけに限られていないだろうか。

しかし、物語の展開において視覚以外の感覚も機能していないわけではない。今度は『いさかい』に見られる他の感覚、主として触覚との比較から作品における視覚の意味を考察してみたい。

戯曲の冒頭で、屋敷の外に連れ出されたエグレはすぐに小川に映る自分を見、自分の姿の美しさに夢中になる。しかし、初めての異性アゾールとの出会いから、興味の対象は自分から他者へと移る。以下はその二人の出会いの場面での会話である。

AZOR : J'ai beau être auprès de vous, je ne vous vois pas encore assez.

ÉGLÉ : C'est ma pensée, mais on ne peut pas se voir davantage, car nous sommes là.

AZOR : Mon cœur désire vos mains.

ÉGLÉ : Tenez, le mien vous les donne ; êtes-vous plus contente?

AZOR : Oui, mais non pas plus tranquille.

ÉGLÉ : C'est ce qui m'arrive, nous nous ressemblons en tout.

(Sc. IV, p.549)

アゾールはエグレに対しまず視覚について言及しているが、すぐに相手の手という身体的接触を求めている。この接触は性的ニュアンスを含んだものであることは、*«desire»* という単語からも十分推測できるだろう。エグレはアゾールの申し出をすぐに受け入れ、手を素直に相手に委ねている。視覚から始まった異性との接触は、「言葉にできない」興奮状態を生み出し、身体的接触への欲求へと導かれるのだが、ここでは、エグレもアゾールと同様に興奮状態におかれ、手を触れ合った時の「落ち着かない気持ち」も共有しているのだ。ラコーはエグレが小川に自分の姿を発見するや否や、純真な娘が、小川を鏡代わりに様々な表情を作って見るのを楽しむコケットになってしまっていると指摘しているが、⁴⁾エグレはたとえその場面でコケットの片鱗をのぞかせているとしても、真のコケットには未だ程遠い。男性と同様に「落ち着かない気持ち」を感じていることを偽りなく相手に伝える、未だ純真な娘なのだ。そして、二人の接触は次のように展開している。

ÉGLÉ : [...] où étiez-vous quand je ne vous connaissais pas?

AZOR : Dans un monde a moi où je ne retournerai plus, puisque vous n'en êtes pas, et que je veux toujours avoir vos mains ; ni moi ni ma bouche ne saurions plus nous passer d'elles.

ÉGLÉ : Ni mes mains se passer de votre bouche ; mais j'entends du bruit, ce sont des personnes de mon monde : de peur de les effrayer cachez-vous derrière les arbres, je vais vous rappeler.

AZOR : Oui, mais je vous perdrai de vue.

ÉGLÉ : Non, vous n'avez qu'à regarder dans cette eau qui coule, mon visage y est, vous l'y verrez.⁵⁾

(Sc. IV, p.550)

ここでもエグレが身体的接触に対する羞恥心や道徳的ためらいを全く持っていないことに注目したい。エグレの手に触れたアゾールは更に大胆になり彼女の手口に口づけているが、エグレはアゾールの言動に全く同意している。『恋に磨かれたアルルカン』の純朴な娘シルヴィアが、習い覚えたコケットリーに従い手へのキスを嫌がるそぶりをするのとは対照的である。⁶⁾手と手から手と唇へと進んだ接触は、更にエスカレートしていくことを予想させる。しかし、ここで二人の接触を邪魔するもの、他の人々（実はカリーズとメスルー）がまず音として、聴覚から恋人たちの間に介入する。この介入によって、二人の接触は再び視覚の問題へと引き戻されている。しかし、アゾールの行為がエグレに強い印象を与えたことは、エグレがカリーズとメスルーに語りかける次の言葉によく表われている。

ÉGLÉ : [...] j'ai fait l'acquisition d'un objet qui me tenait la main tout à l'heure.

CARISE : Qui vous tenait la main d'Églé, eh que n'avez-vous appelé à votre secours.

ÉGLÉ : Du secours contre quoi, contre le plaisir qu'il [= AZOR] me faisait ; j'étais bien aise qu'il me la tint, il me la tenait par ma permission, il la baisait tant qu'il pouvait, et je ne l'aurai pas plus tôt rappelé qu'il la baisera encore pour mon plaisir et pour le sien.

(Sc. V, p.550)

この場面で、エグレはアゾールとの身体的接触をはっきりと「le plaisir」と言い切っている。より積極的に身体的接触を求めたのはアゾールだとはいえ、エグレも同様に身体的接触による快楽を感じていたことが分かる。「あなた方に与えられた自然の掟は、お互いに魅惑しあうことなのよ。」(Sc. VI, p.551) というカリーズの言葉に、「魅惑しあう」ことが身体的接触を意味するのだと捉えたエグレは、呼び戻したアゾールの手を取り同意する。しかし、続けてカリーズとメスルーは「二人がいつまでも愛し合うため」という名目で、「互いに会う喜びを捨てる」(Sc. VI, p.551) よう提案するのだ。すでに音による介入で二人の身体的接触を妨げ、間接的に二人の関心を互いを視界から失うという視覚の問題へと向けたカリーズとメスルーは、今度は二人にしばらくの別離を提案し、エグレの触覚への関心を視覚へと再び向かわせる。

そこでエグレとカリーズは次のように反論する。

ÉGLÉ : [...] au lieu que nous nous charmons Azor et moi, il est si beau, moi si admirable, si attrayante que nous nous ravissons en nous contemplant.

AZOR *prenant la main d'Églé*: La seule main d'Églé, voyez-vous, sa main seule, je souffre quand je ne la tiens pas, et quand je la tiens, je me meurs si je ne la baise, et quand je l'ai baisée, je me meurs encore.

ÉGLÉ : L'homme a raison, tout ce qu'il vous dit là je le sens ; voilà pourtant où nous en sommes, et vous qui parlez de notre plaisir, vous ne savez pas ce que c'est, nous ne le comprenons pas nous qui le sentons, il est infini.

MESROU : Nous ne vous proposons de vous séparer que deux ou trois heures seulement dans la journée.

(Sc. VI, p.552)

エグレはまず二人にとっての視覚の重要性を語り、次にアゾールはエグレの手、触覚での接触の重要性を語る。繰り返される「僕は死んでしまう」と言う表現には強い性的欲求が感じられる。触覚から引き起こされる快樂への強い欲求を、エグレもまた同様に感じている。そして、「それは無限だ」と言われるほど強く意識されているのだ。それに対し、メスルーたちは再び二人にしばらくの別れを提案する。メスルーとカリーズは、この場面でも、身体的接触とそれによる快樂の意識から若者たちを引き離す役割を果たしている。

そして、メスルーとカリーズは更に若者たちの関心を視覚へと強く引きつけようとする。

CARISE : [...] tenez Églé, donnez ceci à Azor, ce sera de quoi l'aider à supporter votre absence.

ÉGLÉ *prenant un portrait que Carise lui donne*: Comment donc, je me reconnais, c'est encore moi, et bien mieux que dans les eaux du ruisseau, c'est toute ma beauté, c'est moi, quel plaisir de se trouver partout, regardez, Azor, regardez mes charmes.

AZOR : Ah, c'est Églé, c'est ma chère femme, la voilà, sinon que la véritable est encore plus belle.

Il baise le portrait.

MESROU : Du moins cela la représente.

AZOR : Oui, cela la fait désirer.

Il le baise encore.

ÉGLÉ : Je n'y trouve qu'un défaut. Quand il le baise, ma copie a tout.

AZOR *prenant sa main qu'il baise* : Ôtons ce défaut-là.

ÉGLÉ : Ah ça, j'en veux autant pour m'amuser.

MESROU : Choisissez de son portrait ou du vôtre.

(Sc. VI, p.553)

カリーズはエグレとの別れを忍ぶ術として、アゾールにエグレの肖像画を与えようとする。しかし、肖像画は偶然にか故意にか、まずエグレの手へと渡され、エグレは小川に続き再び自分の姿を肖像画に見だし、夢中になってしまう。エグレの意識は、異性との身体的接触の快樂へ一時は向いていたが、ここで視覚の快樂へと大きく戻されている。アゾールにとっては「美しいエグレ」という視覚が、身体的接触への欲求と結びつくのには比べると、二人の行動には違いが見受けられる。アゾールはここでも「肖像画を見るとエグレを求めてしまう。」と「desirer」という言葉を使っている。肖像画にキスするアゾールを見て、エグレは自分が放っておかれるのを気に入らないのだが、アゾールはそんなエグレの手に口づける。身体的接触に再び満足感を覚えるエグレに対し、メスルーたちはまた、肖像画という視覚の問題に関心を向けようとしている。メスルーとカリーズは、若者たちの身体的接触が進行していくのを妨げようとしているばかりか、巧みに視覚へ意識が向くように誘導していると言えるのではないか。「自分のものかアゾールのものかどちらかを選ぶように」と言われたエグレは、自分の肖像画を選んでしまう。メスルーとカリーズに誘導されながらも、エグレは他者よりも自分の姿を自分から選んでいくのだ。そんなエグレに対し、カリーズは肖像画の代わりに、鏡、より正確に自己の姿を写す〈第二の小川〉をエグレに与える。

メスルーとカリーズがいなくなったあと、エグレとアゾールは二人で鏡をのぞきこみ、次のように会話する。

ÉGLÉ : Ah, je suis bien aise d'y [= dans le miroir] voir un peu de vous aussi, vous n'y gâtez rien, avancez encore, tenez-vous bien.

AZOR : Nos visages vont se toucher, voilà qu'ils se touchent, quel bonheur pour le mien, quel ravissement.

ÉGLÉ : Je vous sens bien, et je le trouve bon.

AZOR : Si nos bouches s'approchaient.

Il lui prend un baiser.

ÉGLÉ *en se retournant*: Oh, vous nous dérangez, à présent je ne vois plus que moi, l'aimable invention qu'un miroir!

(Sc. VII, p.554)

二人で鏡をのぞき込む場面でも、アゾールの関心は視覚よりも触覚へ、自分の顔がエグレの顔へ触れあっていることに向かっているのが分かる。この接触による快楽をエグレもはっきりと感じているのだが、アゾールが鏡の中のエグレではなく、本物のエグレに接触しようとする時、エグレはそれを振り払い鏡に自分だけで向かうのだ。

カリーズとメスルーの忠告を聞き入れて、アゾールと一時離れたエグレは、次のように独白する。

ÉGLÉ *seule*: Ah! il n'y est plus, je suis seule, je n'entends plus sa voix, il n'y a plus que le miroir, (elle s'y regarde.) j'ai eu tort de renvoyer mon homme, Carise et Mesrou ne savent ce qu'ils disent, (en se regardant.) si je m'étais mieux considérée, Azor ne serait point parti, pour aimer toujours ce que je vois là, il n'avait pas besoin de l'absence... Allons, je vais m'asseoir auprès du ruisseau, c'est encore un miroir de plus.

(Sc. VIII, p.555)

「あの人の声ももう聞けない」と、エグレは鏡に向かうことに専念する。アゾールの声は、物理的に追いやられてしまったばかりか、エグレの意識の中でもエグレ自身の姿に取って代わられる。エグレは手持ちの鏡ばかりか、さらに自分の姿を求めて小川へと向かう。「もう一つの鏡」を求めて。「自分を眺める」〈se regarder〉というト書きと「鏡」〈miroir〉の繰り返し返しが、他のさまざまな感覚と、他者を締め出し、視覚と自己のみで成り立つ世界を形作っていくのである。

マリヴォーは『いさかい』の中で、触覚に対して男性と同様に快感を覚えながらも、始めは他者からの介入に妨げられ、次に自分から視覚を、自分を見る喜びを選んでいく女性を描きだす。他の感覚、とりわけ触覚と共に提示されながらも視覚が選ばれていく過程がここでは示されている。マリヴォーは物語を展開させていく装置の役割として視覚をとらえ、視覚のドラマとして『いさかい』を創りだしたのではないだろうか。

註

- 1) RACAULT (Jean-Michel), «Narcisse et ses miroirs : système des personnages et figures de l'amour dans *La Dispute de Marivaux*», in *Revue d'histoire du théâtre*, t. X X III, fasc. 2, 1981, pp.103-115.
- 2) 井村順一, 「マリヴォー劇構成と鏡－喜劇「いさかい」分析」, 『彷徨の祝祭』白井健三郎古稀記念論文集, 朝日出版社, 1986, pp.389-399.
- 3) 『いさかい』の引用についてはプレイアード版(MARIVAUX, *Théâtre complet* II, édition établie par Henri COULET et Michel GILOT, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1994, pp.543-570) により, 引用末尾に頁番号, ページ数の順に示す。引用に付した下線及び波線は全て引用者による。なお, 本文中の邦訳については「いさかい」, 『新マリヴォー戯曲集1』, 井村順一訳, 大修館書店, 1989を参照させていただいた。
- 4) RACAULT, *op. cit.*, p.111.
- 5) 引用文中の波線と下線はそれぞれ触覚と視覚に関する事柄を示す。
- 6) MARIVAUX, *Théâtre complet* I, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1993, Sc. XI, pp.125-126.